

国際日本文学研究集会会議録 (第21回)

PROCEEDINGS OF THE 21st INTERNATIONAL CONFERENCE
ON JAPANESE LITERATURE

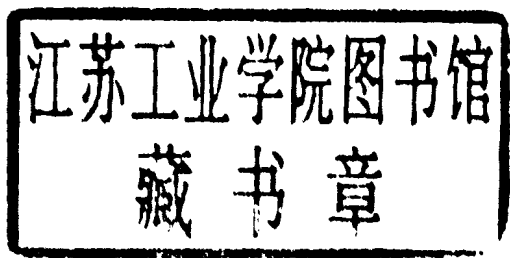
(1997)

国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE

**PROCEEDINGS OF THE 21st INTERNATIONAL CONFERENCE
ON JAPANESE LITERATURE**

1997



National Institute of Japanese Literature

1-16-10, Yutaka-cho, Shinagawa-ku,
Tokyo, 142-8585

発行

平成10年10月

編集兼発行者

国文学研究資料館

〒142-8585 東京都品川区豊町1-16-10

電話 (03) 3785-7131(代)

FAX (03) 3785-7051

印刷所

株式会社 三協社

〒164-0011 東京都中野区中央4-8-9

電話 (03) 3383-7281

目 次

挨拶	松 野 陽 一	2
----	---------	---

研究発表

保胤「池亭記」の隠棲思想	劉 魯 平	9
日・韓における伝承のあり方 —「さよひめ」説話と「堤上」説話—	金 京 欄	21
泉鏡花「聾の一心」論 —自筆原稿との比較を通して—	魯 惠 卿	37
「二世」から見る、戦前における台湾文学 —周金波、川合三良を中心に—	唐 瓊 瑜	55
『吉里吉里人』における国家形成と 主体性の喪失	Christopher ROBINS	69
越境する文学 —方法としての「由熙」—	顧 偉 良	81

特集「境界と日本文学—ジャンルの交流—」

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」における 大衆文化の表象	中 根 隆 行	99
『風の又三郎』における〈重ね書き〉 —昭和15年日活映画の受容に着目して—	米 村 みゆき	114
人文と科学：最後の境界を越えて	Timon SCREECH	130
セッション討議		143

公開講演

本文・注釈・絵	今 西 祐 一 郎	145
和歌から説話を見る —唱導史の観点を中心にして—	Hartmut O. ROTERMUND	164

記 録

第21回国際日本文学研究集会	182
参加者名簿	183
国際日本文学研究集会委員名簿	187

挨拶

松 野 陽 一

今年度から館長になりました松野と申します。よろしくお願いいたします。

国文学研究資料館はできてから二十六年経ちます。研究もやっておりますが、まずは国文学の資料を調査・収集するというのが第一の基本的な仕事でございます。その資料収集は江戸の終わりまでのものを集めるのが基本でございましたから、専任の教官にも古い時代をやる人ばかりで、近代を担当する人がいなかった。そのため、全体的な印象として古いものをやっているのが国文学研究資料館だということがあったかもしれません。

その中で私どもで出している『国文学年鑑』という研究情報を集める出版物は、近代を含めて扱っておりまして、ご利用いただいた方も多いかと思います。そして、この国際日本文学研究集会、これは最初から近代のご発表が多かったので、これがもうひとつの我が館の近代に対する窓だったわけです。ところが、先ほど申しましたように、館内に近代の研究者がいなかったものですから、やむをえず館外の近代文学・現代文学を研究する先生方にいろいろなかたちでご支援をいただくということでやってきたわけです。が、今年の十月から当館にも近代を担当する部屋ができました。まだ担当者は一人しかおりませんが、着々と体制は整っていくだろうと思います。この会もある程度館

内の人間が担える時代にやっと入ることができたということになります。このことは当然古典の方にも大きな影響が及ぶはずでして、古いところから近現代に及ぶまで一貫して対応できるような体制をなるべく早く作りたいと思っておりますし、そのためにもこの会が活発になってほしいと願っているところであります。

去年は大変活況を帯びる会が催せたと思います。それは企画の武井さんらの工夫によるところですが、招待研究発表をやりましたり、セッション討議に工夫を加えたりということがあったからかと思います。今年も、今西先生、ロータモンド先生のご講演、それからスクリーチ先生の招待研究発表が明日に控えております。今日これから始まる発表にも面白そうなものが並んでいるわけですし、どうぞ活発な会にさせていただくようお願いしたいと思います。

あいさつ

日本文学研究

松野陽一 館長



研究発表



劉魯平氏



金京欄氏

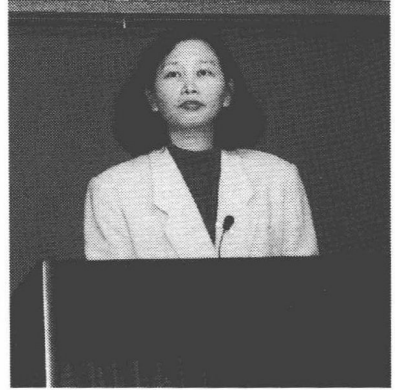
研究発表

下入丁明



魯惠卿氏

下入丁明



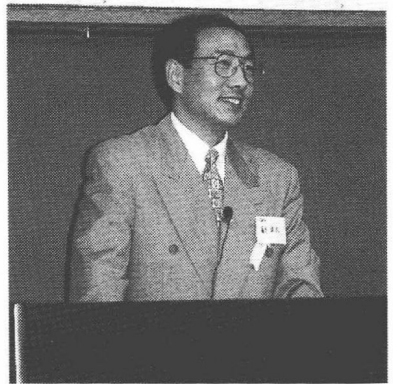
唐瓊瑜氏

文字研究



Christopher ROBINS 氏

下入丁明



顧偉良氏



中 根 隆 行 氏



米 村 みゆき 氏

招待研究発表



Timon SCREECH 氏

討 議



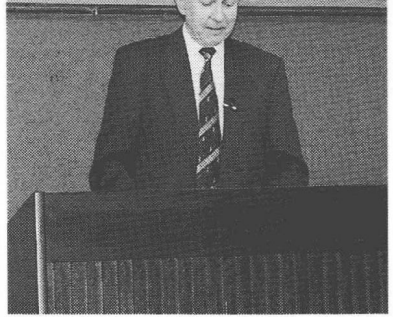
公 開 講 演

文学研究集



今 西 祐一郎 氏

本文学研究集



Hartmut O. ROTERMUND 氏

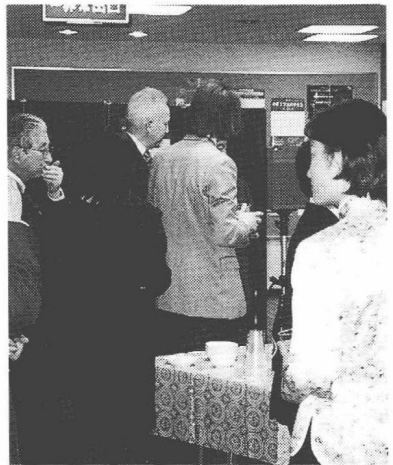
閉 会 挨 拶

本文学研究



立 川 美 彦 研究情報部長

レセプション



保胤『池亭記』の隠棲思想

THE PHILOSOPHY OF SECLUSION IN YASUTANE'S *CHITEI-KI*

劉 魯 平*

It is generally accepted that Chinese culture and philosophy have made a big impact on the ruling class society in the Heian period of Japan. The Japanese government officials who thought along Chinese traditional ways went into seclusion in Heian Japan. But the bureaucratic nobility of the Heian period, such as the Taneyasu, assimilated these ideas into Japanese culture and made them a reality in practice. It was not a carbon copy of the original, although the Japanese adopted the Chinese tradition of living in seclusion there were many differences below the surface. In fact it has become an altogether concept.

This paper examines Yasutane's "Chitei-ki", an elaborate reworking of Hakkyoi's "Chijou-hen". In particular, I shall look at how the two authors' interpretations of *Insei* (the secluded life).

*LIU Luping 中国西安外国語大学日本文学学科卒業。弘前大学人文科学研究科修士課程修了。現在新潟大学現代社会文化研究科博士課程在学中。研究分野は比較社会文化論（平安朝文芸作品における漢詩文の影響）。主な論文に「民族主義的相対化在中国近現代研究中的意義」（翻訳）（『中国研究月刊』1995. 1 巻第 3 号）、「浅談“中国威脅”論」（『邁向新世紀的中国』研討會論文集）1996. 7）がある。

Finally, in addition to summarizing the personal careers of Yasutane and Hakkyoi, I would like to examine the cultural environments they inhabited, and thereby hope to discover the causes of their differing attitudes to *Insei*.

はじめに

平安時代の中期に生きた賀茂保胤が、白居易の『池上篇』を踏まえて、『池亭記』を著したことはすでに周知の事実です。それならば、『池亭記』に表現されている、そのテーマともいえるべき隠棲思想は、白居易の隠遁思想と比べて、どのような特色をもっているのでしょうか。白居易をどのように受容したか、という問題については、すでに金子彦二郎氏の『平安時代文学と白氏文集－句題和歌・千載佳句研究篇』をはじめ、数多くの研究論文が書かれています。それらを概観すると、おおよその傾向として、賀茂保胤は白居易の隠棲思想をほぼ忠実に継承したとする見方、あるいは、両者の相違をはっきりさせなかったという点で共通しているように思われます。はたして、このような通説は正しいのでしょうか。もう一度原点にもどって、新しい目で比較研究を試みる必要があると思います。

本発表では、『池亭記』のなかから、隠棲思想がとくに強く表現されている部分をとりあげ、それを『池上篇』と比較・分析することによって、賀茂保胤の隠棲思想がいかなるものであったのかをあきらかにしたいと思います。保胤の隠棲思想のあり方を具体的にあきらかにすることによって、保胤が貴族官人として「身」と「心」との矛盾をどう解決しようとしていたかが解明されます。そしてそこにこそ、白居易の『池上篇』と保胤の『池亭記』との決定的な相違と、保胤の隠棲思想の独自性が横たわっているように思います。

一 平安朝文人における中国隠棲思想の受容

古来、中国において「隠遁」「遁世」あるいは「隠居」とは、政治社会と対立し、現実社会から逃避しようとする行為を示しています。資料1（末尾参照）

の下線部をご覧ください。たとえば、孔子は

不入危邦、不居乱邦、天下有道則見、無道則隱。

と述べています。孔子は、天下（政治社会）が秩序立っていて、その政治理念が自分の考える所と一致しているならば出仕すべきだが、そうでなければ隠遁すべきだ、と考えていたのです。また資料2（末尾参照）をご覧ください。「不事王侯、高尚其事」「或隱居以求其志」とあるように、己（儒士として）の志を追求するために、王侯に仕えることを拒否する態度をとるのであって、時には隠棲するのです。

以上を総合してみますと、中国において隠遁と出仕とは、対立することだったのです。資料3（末尾参照）をご覧ください。漢の劉安の「招隱士」のなかに書かれているように、中国では、さわがしい都から遠く離れて山奥に隠れ、自然につつまれて棲むことが隠棲であったのです。晋の「竹林七賢」は、中国で「竹林諸賢」「竹林名士」とも呼ばれています。しかし、「隠士」－隠棲している名士としては認められていませんでした。それは、礼教に対し反抗的な態度をしめした彼らであるのに、山中に隠棲せず都にとどまり、政治社会から遠ざかることをしなかったために、ほとんど「隠士」としてみとめられなかったのです。

くどくなりますが、資料4（末尾参照）をご覧ください。平安朝の文人たちは、中国古来の隠遁生活に憧れの意を示しながら、同時に、隠遁者でないはずの竹林七賢を理想の「隠士」－隠棲者と捉えています。具体的に見てみましょう。資料5（末尾参照）をごらんください。「七子超然混同ならず、何台閣勲功を録するに要る」とあり、保胤も例外なく『池亭記』^①の中で「晋朝七賢為異代之友、以身在朝志在隱也」と讃えているのです。平安朝の文人たちや保胤はどうして竹林の七賢を理想の「隠士」として捉えたのでしょうか。

すこし脇道にそれて説明してみますが資料6（末尾参照）をご覧ください。「居を山水にうらない、心機をやすめ、人間に是非をばくすることをいさぎよしとせず」と隠棲思想が表現されています。その隠棲思想は、家永三郎氏が指

摘しているように、「漢籍によって伝えられた文字上の知識に由来」^②していたり、現実社会の矛盾・煩悶から脱出したい強烈な要望、いわゆる「山里への志向」^③によるものとも考えられます。

よく『池亭記』と比較される鴨長明の『方丈記』においても、山里への志向－隠棲思想があらわれています。参考資料に挙げていますが、『方丈記』の冒頭に記しているように、『方丈記』の隠棲思想は現実世界を否定したうえに成り立っています。資料7（末尾参照）をご覧ください。「登臨俗にほかならず、吏隠とも相かねる」といっている平安朝文人また保胤の、精神上的の隠棲とはまったく異質なものと言えるでしょう。

くりかえしますと、『池上篇』が隠遁思想を表現しているならば、『池上篇』を踏まえて書いている保胤の『池亭記』は、隠遁思想をのべているのでしょうか、それとも隠士思想を述べているのでしょうか。次に、両者を比較しながら共通・類似点と対立・相違点を明らかにしてみたいと思います。

二 『池上篇』『池亭記』による隠棲思想の比較

資料8をご覧ください。両者にたくさんの共通・類似点、対立・相違点がありますが、特に大切なものについて三点に分けて表にしてみました。この表にしたがって説明していきます。

まず、1のaをご覧ください。『池上篇』は白居易の晩年に近い頃の作品です。彼は文章のはじめに池を囲む邸宅を「退老之地」つまり老後を過ごす場所と記しています。それに対して、保胤は中国古代の有能な実力官吏に見習い、「上拱簾相国窮僻之地、下慕仲長統清曠之居」とのべ、官人としての「池亭」を建てるのだと明言しています。このように、邸宅を営む目的が白居易と保胤は始めからそもそも異なっているのです。

2のaをご覧ください。作者それぞれの目的によって、白居易には「琴亭」、保胤には「弥陀堂」が建てられています。白居易は琴書酒に囲まれた生活を楽しむことによって、政治社会を忘却しようとしているのに対して、保胤は仏教

資料 8

1. どういう目的で亭に住むか『池亭記』	『池上篇』
対立・相違点 a 上筑簫相国窮僻之地、下慕仲長統清曠之居。 b 其家自富、其主自寿。官位永保、子孫相承。 共通・類似点 (なし)	a 即白氏搜退老之地。 b 吾将終老乎其間。
2. 建物の配置・様子『池亭記』	『池上篇』
対立・相違点 a 池西置小堂安弥陀…池北起低屋着妻子。 b なし 共通・類似点 a 地方都廬十有余畝。就隆為小山、遇窪穿小池…池東開小閣納書籍。 b 凡屋舍十之四、池水九之三、菜園八之二、芹田七之一。	a なし b 又曰、雖有賓朋、無琴酒不能娛也、乃作池西琴亭。 a 又曰、雖有子弟、無書不能訓也、乃作池北書庫加石樽焉。 b 地方十七畝、屋室三之一、水五之一、竹九之一、而島樹橋道間之。
3. 生活の様子『池亭記』	『池上篇』
対立・相違点 a 其外綠松島。白沙汀、紅鯉白鷺、小橋小船、平生所好、尽在於中。 b 盥漱之初、參西堂、念弥陀、誦法華。飯食之後入東閣、開書卷、逢古賢。…予杜門閉戶、独吟独詠。若有余興者、与兒童乘小船、叩舷鼓棹。若有余暇者、呼童僕入後園、以糞以灌。吾愛吾宅、不知其他。 共通・類似点 (なし)	a 有堂有亭、有橋有船、有書有酒、有歌有絃。有叟在中、白鬚飄然、識分知足、外無求焉…靈鶴怪石、紫菱白蓮、皆吾所好、尽在我前。 b 每至池春風、池秋月、水香蓮開之旦、露清鶴淚之夕、拂楊石、拳陳酒、援催琴、彈姜《秋思》、頽然自適、不知其他。
その心情『池亭記』	『池上篇』
対立・相違点 a 家主、身雖在柱下、心如住山中。不樂人之為風鵬、不樂人之為霧豹、不要屈膝折腰、而求媚於王侯將相、又不要避言避色、而刊從於深山幽谷。在朝身暫隨王事、在家心永埒仏那。 共通・類似点 a 予行年漸垂五旬、適有小宅。鰻安其舍、虱樂其縫。鳥住小枝、不望鄧林之大、蛙在曲井、不知滄海之寬。	a 時引一盃、或吟一篇。妻孥熙熙、鷄犬閑閑。優哉遊哉。 a 如鳥拊木、姑務巢安、如龜居坎、不知海寬。

的な生活を営んでいくことを目的としているところに特色が顕れていると思います。

3「生活の様子」の『池上篇』の下線部をご覧ください。白居易は『池上篇』の中で、「頽然自適、不知其他」と述べています。白居易の琴酒でもって自適するという風流の生活を楽しむ姿がみられます。しかし、白居易にとって、政治社会こそ自分自身の社会的価値を確かめる場所であり、儒生つまり儒教精神を持った官人としての「兼濟」の抱負を実現させる唯一の場でした。これは、白居易だけの傾向ではありません。政治上の出世を一生の目標とするのは、儒教本位である中国の一般知識人の生き方だと言えるでしょう。政治の中心から除外された白居易は、儒生としての居場所がなくなり、やがて〈池上〉の中で「独善」の道を歩み始めました。

同じ資料の左の部分をご覧ください。保胤は、「盥漱之初、參西堂、念弥陀、誦法華」と「池亭」での閑的な生活ぶりを具体的に述べています。つまり彼は「池亭」を出れば、政治社会において自己の価値を認めてもらえるように、官人として真面目に「王事」－「公」に仕えることに心をつくしている一方、公事を終え「池亭」に戻ると、「仏那」に精神の安らぎと「私」だけの空間を求めているのです。こうして、保胤は「池亭」を外の世界と一線を画し、仏教に基づく独自の精神生活を確保しました。

大切なことなので、わずらわしいのですが、もう一度くりかえすことにします。3の「その心情」の部分をご覧ください。保胤は「身雖在柱下、心如住山中」「在朝身暫随王事、在家心永帰仏那」と言っています。ここからは白居易の俗世を超越しようとしている〈池上生活〉とは正反対に、保胤の〈池亭生活〉は「身」と「心」とが分かれていると言えます。しかし、その「身」と「心」とは、いままで言われてきた対立関係ではなく、相関関係だと思います。なぜならば、保胤は毎日、身を持って「王事」に奉仕する昼の生活と、「仏那」に随い己の心を取り戻す夕方の生活を繰り返しています。言い換えれば、保胤は「池亭」のなかで現実に居る「身」と隠棲している「心」を矛盾なく調和させ